

棹

太



第九拾八號

加藤虎之助  
しげき画

# 暑 中 御 見 舞

## 胃 腸 に ミ ラ チ

東京市日本橋區通二ノ五  
新潮製藥株式會社  
電話日本橋三八二番  
銀座東京七〇一〇八番

空氣がよくて

閑靜なアパート

(省線蒲田驛下車松芳雜貨店より左へ入る)

蒲田區御園町二ノ一四

シルヴァハウス

電話蒲田三六二一番

風流・金ぷら・茶漬

【美地句】

去月屋

新橋二ノ八  
電銀二〇八

皇軍の武運長久を祈り  
暑中御見舞申上候

(芳名掲載順不同)

暑 中 御 見 舞

白  
井  
清  
華

金  
田  
金  
鳳

暑 中 御 見 舞

小  
林  
和  
舟

井  
上  
巽

暑 中 御 見 舞

高  
瀬  
操

湯  
原  
清  
司

錦  
錦  
松

廣  
瀬  
い  
ろ  
は

暑 中 御 見 舞

大用大嘉津

中野吳羽

清水改メ

山下彌生

野口みなと

暑 中 御 見 舞

---

近  
江  
清  
華



暑 中 御 見 舞

武

笠

宏

亮

松

岡

語

松

暑 中 御 見 舞

鈴 木 和 樂

高 橋 可 遊

巴 雪 會

阿 部 一

緒 方 千 晴

暑 中 御 見 舞

---

寶藏寺天昇

暑 中 御 見 舞

中

澤

巴

齋

藤

山

生

暑 中 御 見 舞

田 口 司 重

松 岡 茂 里 雄

原 田 越 巴

淺 田 奇 聲

暑 中 御 見 舞

坂

倉

素

遊

保

々

長

平

暑 中 御 見 舞

---

鈴  
木  
松  
寶

暑 中 御 見 舞

岩 木 義 雀

平 井 榮

松 本 朝 章

小 埜 長 と ろ



暑 中 御 見 舞

川 奈 部 銀 司

大 築 葵

吉 川 浪 補

菊 池 秋 月

暑 中 御 見 舞

安 藤 ど ぐ る

暑 中 御 見 舞

岩  
田  
未  
成

及  
川  
旭

根  
本  
團  
壽

乃  
村  
乃  
菊

暑 中 御 見 舞

---

細

川

清

本所區東兩國二丁目四  
電話本所〇八一八番

暑 中 御 見 舞

野澤道之助

鶴澤絃平

神馬里芳  
鶴澤勝助

吉田登盛  
野澤彖造

暑 中 御 見 舞

鶴澤司好

竹本彌國太夫

鶴澤寬三郎

豊澤芳太郎

暑 中 御 見 舞

竹 本 素 女

竹 本 佳 照

義 太 夫 座

竹 本 駒 若

自 宅 淺 草 區 田 島 町 三 七  
電 話 淺 草 三 六 三 〇 番

竹 本 播 志 保

暑 中 御 見 舞

三 福 會

高野清遊

浮谷祖樂

佐久間福司

稻葉福代

竹本三福

栗原千鶴

保坂有曲



暑 中 御 見 舞

手塚てつか

岡田源

若 手 會

(順 ハ ロ イ)

竹	野	豊	素	湯	川	野	岡	安	山
本	澤	竹	澤	淺	口	田	本	藤	田
都	桑	和	力	光	子	高	柳	都	呂
太	造	孝	彌	玉	太	尾	光	昇	聲
夫					郎				

暑 中 御 見 舞

京濱素義聯盟會長

國 友 東 光

水 戶 部 壽

人形淨瑠璃研究

南 北 座

東京市目黒區中目黒  
四丁目一四七五番地  
電話大崎三八二九番

暑 中 御 見 舞

柳 有 明

柴 野 筑 波

黑 川 叶

新 義 座

座 員 一 同

關 東 事 務 所

東 京 市 芝 區 新 橋 二 〇 八

志 ぼ 屋

電 話 銀 座 二 〇 八

中 央 事 務 所

大 垣 市 城 畔

吉 岡 樓

電 話 一 〇 八 一 七 九

關 西 事 務 所

大 阪 市 北 區 會 根 崎 新 地  
三 〇 一 五 〇 一

千 代 本

電 話 (北) 一 三 五 八

暑 中 御 見 舞

東 都 五 十 義 會

事 務 所

京 橋 區 木 挽 町 四 ノ 二  
電 話 京 橋 一 〇 〇 六 〇 〇 五 番

駒 登 會 連 中

暑 中 御 見 舞

淨 曲

無 名 會

(順 八 口 一)

桑	河	松	鈴	中
原	野	田	木	澤
美	國	和	和	
峰	聲	か	葉	樂 巴

銀 座 義 榮 會

暑 中 御 見 舞

中 老 會

事  
務  
所

和 保 西 原 柳 淺 高 木 松

岡 下 田 田 田 田 谷 田  
瀨

茂 松 奇 有 越 可 紅 春  
里

和 司 松 巴 明 聲 操 玉 雄

淺草區千束二丁目一五九番  
電話根岸(87)一

(イロハ順)

暑 中 御 見 舞

都 太 夫 會

國	井	丸	都	小	川	都	山	小	川	都	川	井	上	巽	安	藤	都	昇	竹	本	都	太	夫
---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---

本所區吾妻橋一ノ一九

芳 聲 會

一	辰	里	千	清	豐
重	壽	芳	壺	芳	澤

豐澤芳太郎

暑 中 御 見 舞

朝 見 會

竹 本 朝 見 太 夫	島	平	島	山	青	松	野
	倉	井	倉	崎	島	岡	中
	仙	壽	松	昇	廣	波	一
	昇	樂	香	朝	昇	朝	竹

(イロハ順)

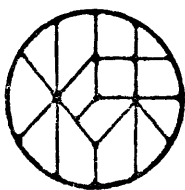
綾 秀 會

(順ハロイ)

竹 本 綾 秀	島	藤	笹	酒	嵐	山	南	大	石	石
	田	原	本	井		田	條	谷	塚	川
	綾	綾	竹	龍	司	壽	壽	大	歌	治
	登	路	始	司	光	瓢	光	瓢	吉	光



暑 中 御 見 舞



兜

會

事 務 所

日本橋區兜町一丁目四番地  
鈴 木 甚 四 郎 方  
電 話 茅 場 町 三 三 五 五 六 六 五 番

暑 中 御 見 舞

---

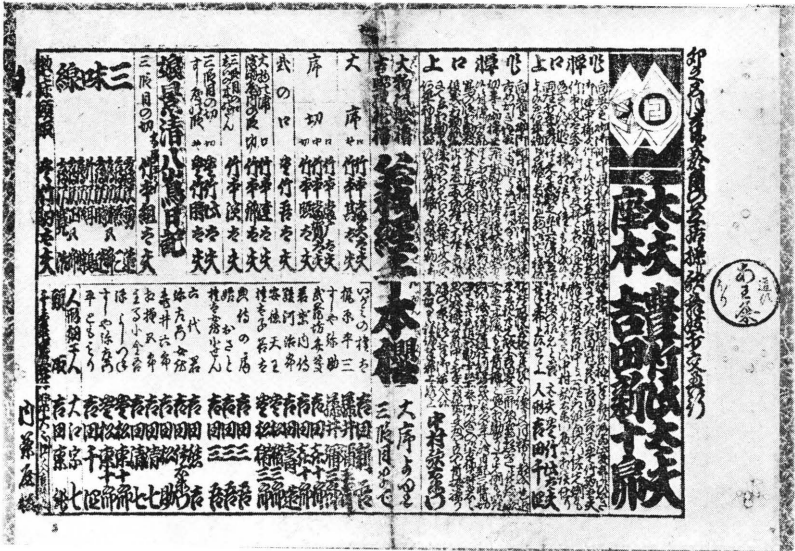
長 谷 川 文 久

星 野 桔 梗

吉 田 三 芳

安 藤 光 樂

(イロハ順)



（寫眞説明）

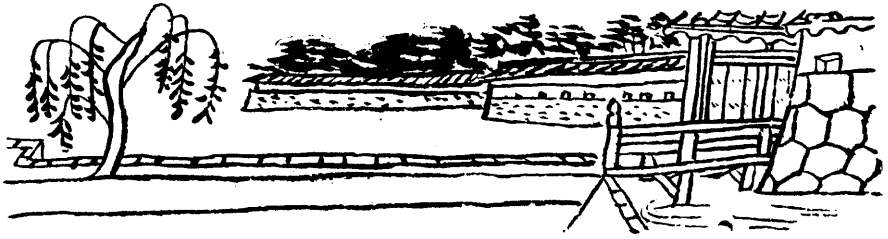
嘉永五年九月道頓堀竹田の芝居で、長門太夫が大阪へ戻つた記念興行があり、三十年來の大當りであつたと云はれます。翌六年三月若太夫芝居で子供首振芝居の興行があつて、それに子供太夫、子供三味線を配し、長子太夫が其座頭として迎へられました。この時に一部から批難が起つて、長子太夫が師匠の長門太夫に相談をしました處、長門は前例を引用して無事に納めたと申します。寫眞は天保二年卯の五月角の芝居に於ける『操歌舞伎打交興行』の番附であります（中澤巴氏所藏）

以下は木谷蓬吟氏著五世竹本彌太夫藝の六十年より拔萃（前略）その初日に先つて、一部から批難の聲が湧き上つた。それは本格の太夫が、歌舞伎の舞臺へ出るとは品格を傷つけ、太夫の名聲を汚すものだといふのであつた。この攻撃の矢面に立つた長子太夫は困り切つた一座の關係者と共に、師匠長門太夫の意見を叩いた。長門曰く、天保二年に藍玉の組太夫が人形吉田千四と共に梅玉歌右衛門に景清を勤めさせ、日向島の段を角の芝居で上演した前例がある、勿論役者を人形と見做して物を言はさず、淨瑠璃を語る分には何等差支へはなからうと、事理明白の意見に反對側も一言もなく無事に初日を開ける事が出来た。（以下略）



り釣鯛の氏寶松木鈴……涼 爽

(てに島初海熱)



太 棹 第九拾八號目次

文樂座通ひ四日間……………	齋藤拳三…(二)
ラヂオ淨曲漫評……………	金 王 丸…(八)
近 事 雜 感……………	鵬 我 兒…(三)
音曲昔噺素養……………	鐵 老 生…(三〇)
太 棹 社 彙 報……………	……………(三)
當 座 帳……………	……………(二)
乃木將軍美談錄……………新作	
讃岐國 妻返し松之段……………	吉野菊次郎原作 竹本叶太夫作曲…(四)

編 輯 後 記……………邦 治 生…(二)

口 繪……天保二年角の芝居の番附・鈴木松寶氏の鯛釣り  
表 紙・カ ッ ト……………宮尾しげを……



## 文樂座通ひ四日間

齋藤拳三

七月十三日の都新聞紙上に安藤君は、東京の文樂ファンは常に季節的に最悪の條件の基に、觀賞しなければならぬ宿命にある事を論じて居た。

全く同感で有る。特に私などは遠隔の僻地に住む關係上、三日目、四日目の文樂座通ひは可成の苦痛で、一日位は必ず健康を害する日が有つた。學校をエスケープして新富座の大入場に、當時二十五錢の辨當を買ふ金さへ削いて入場料に替へた昔を思ふと、東京の師匠連が絹上布に白足衣の美服に、最負の御連中と冷麥酒で談笑の内に觀覽する太平無事な姿を見出す事は餘りいゝ氣はしない。

安藤君よ餘りに文樂を怒るな。

君は私より十五歳の年少である、人形淨瑠璃の死に水を取つて貰ひたいと思つてる君に、君の怒り文章を読む時私の心は妙に暗い。

ファンの心は弱い「あと何年の壽命だらふ」年に一度の東上だ」と思ふと、二十餘年前の自分と何等の變化もなく四日間を楽しく通ひ續けた。出し物の不満も、土佐太夫、吉兵衛

友次郎、仙糸、吉彌、無き寂しさも何時か忘れて、近年になき古靱太夫の快調と、人形使ひの一人も缺けてないのを喜んで居る、昔ながらの自分だつたのである。

### 第一回 七月三日見物

古靱太夫の辨慶上使は、此の前の歌舞伎座で發病直前の不出來に引換へ、此の度は近年にない美聲であつた。此の人の御所三は、地味で「鎌倉殿の難題を……」の様な、他の人で聞くとは平凡無味な箇所だと思案にくれる辨慶を色濃く出すのと、信夫の落入りの邊に素直な哀寂感を出すのが特色である。其れと此の度は「戀人も驚きて」以下のエエエを踊らないのが清六との新演出である、成程と敬服する。

只故先代清六在世當時に比して聲量の衰へをかくす爲か、下の音で云ふ箇所が多く、其の爲辨慶が剛快味を缺き、如何にも陰氣なのを難とする。榮三の辨慶は流石に玉藏より動かないで味が有る。

津太夫の寺子屋は簡素、古風にサラ／＼語るのを長所とす

る、一時代前の義太夫を聴く感が心氣よい。

綱造の絃は腕の強さは現役中第一人者だが、情味の感じられないのを難とする。然し此れは紋下を弾く最高峰としての厳正な批評で、先日の東京連の妹背山の三味線などに比すれば大人と子供程の差である。

玉藏の松王は愁嘆場で扇を落して鼻紙を使ふ件が面白い。文五郎の千代も待ち合せの件が人形獨特の技巧で面白い。榮三の源藏は「打てば響けの内には夫婦」で下手柱による件が他の人にない甘さである。政龜の戸浪は手拭を使ひ過ぎはしないかしら。

鍛太夫の酒屋は未だかつて出逢つた事の無い程、めずらしく聲を痛めて居て不振だつた。新左衛門の絃は音も撥も小さいが相變らずいゝ音色である。

鍛太夫は新左衛門を相三味線としてあくまで離さない點が偉い。新左衛門も高齡七十四歳右の耳が悪いと聴く、其れならば太夫が左側に座つて獨特の形で語つて後世の美談としたいものだ。私は眞險に此の説を兩師に建築する。人形は玉次郎の宗岸が傑作である。此の人も今度が最後かも知れない。新織太夫の逆簪は新境著しく、此の逆簪は津太夫系でなく故彌太夫系である。絃の新團六も腕は強し、音はよし、三絃新進中の偉材である。私は世評に反して此の二人の文樂復座を喜ぶものである。要は早く古鞞を脱却する様精進して欲しい。

人形は榮三の松右衛門が良く、權四郎を持上げて上座になす件など人形獨特である。壽式三番叟と團子賣は觀覽税である。

## 第二回 七月六日見物

若手連かけ合の妹背山の道行は期待が多き過ぎて面白くなかつた。此の場の人形も平凡である。次の壺坂、此の人形もつまらない。

榮三の澤市は口三味線の件を立留つて演る。然し此れは團平が歩きながら演る様に、手を附けたと私は聞いている。此れは榮三の思ひ違ひではなからふか。小泉君の御意見は如何。

次の連獅子は觀覽税。

日吉丸稚櫻、小牧山城中の段、中、相生太夫、道八、弾く太夫の一人でも有る間は、死ぬまで高座は隠退しないと壯語する道八老に私は敬意を表する。其の絃も丁寧過る難はあつても美しく手強い。此の人も七十四歳の高齡である。若い人は注目傾聴してやつて欲しい。

文樂の二の變りは此處へ來て始めて勢氣が出て來る。

私は世評と反對に津太夫の小牧山の切りを興深く聴いた。時代に捨てられかゝる此の淨瑠璃の大時代、大甘な趣向は津太夫の朴訥、雄大、無器用な藝によつて世に出た感が深い。其の五郎助も手強く、大きい、私は津太夫四つのおし物中此れを取る。

人形は文五郎のお政が非常な傑作である。ともすると品位を缺く此の人の肩はすし物中、藝質に合つて居る。最初の酔體など特に見事である。

古鞆太夫の堀川は野崎村と共に世話物中の二大佳作である。書置きの件の獨特の甘さ、「亦明日」の味のあるいゝ方、特に此の度は與次郎の言葉に色々新しい試みがあつた。

一例が、お俊を呼ぶ件に、始めはトン狂な大聲で二度目を小聲で二度に云ふ件等である。唯「戸口を明くれば走り行く」は私は反對である。在來の「走りよる」にしたい。あの場合家中の騒動を氣すかつてるお俊が、與次郎に戸口をあけられて逃げて行く筈がない。私の無謀な獨斷によれば、岡田翠雨氏の攝津大掾への忠告から後世此の型が出來たのではなからふか。私には「走り行く」は、お俊が戀人が來てるのではすかしいと云ふ意味に聞へて反對である。安藤君あたり、此の説は如何。

榮三の與次郎は不感服である。お俊と母親との會話中飯を食ふのは惡落ちが來て淨瑠璃の邪魔になる。菊五郎でも吉右衛門でも、與次郎はあすこで素直に二人の話の聞いているだけである。待ち合せにする程の仕草でもあるまいから省略にかざる。

此度の大隅太夫では赤垣出立を取るより外はない。私の最負の大隅のストラップも可成長い。其の相三味線が芳之助、道八、寛次郎、廣助と轉々するのも最負にとつては不安此上もない。

大器晚成居士、もうそろ／＼晩成に着手して頂きたいものだ。

此の人形は平凡である。

### 第三回 七月九日見物

加賀見山舊錦繪の草履打の段は岩藤が呂太夫の日だつた。此れは仲々の上出來で叶の糸もよかつた。

此の場の人形は仲々結構で、櫻花爛漫たる鶴岡社頭に岩藤尾上が腰元と日傘をさして並んで幕開きは、歌舞伎に比して如何にも原始的で味が深く、人形美をいぢりこはして居ない方の第一のもの云へる。

「いやか」で岩藤が人形の女形にはめずらしい可愛らしい足を出して下座の太鼓の音で極る件も面白いし、幕切れに「明日は我身も消て行く」で尾上が腰元の肩に打ちのめされた様にもたれて本つりが這入る。懐から紫の布につゝんだ草履を出して見て泣きながら籠にスーツと入つてしまふ幕切れも味深いものがある。

其れに先代玉藏の死後全然女形を使はなくなつた榮三が、文五郎がお初に出る關係上か、尾上を使ふのは政龜の岩藤と共に此れも今年が最後かとの感も手傳つて貴重に見物した。

次の廊下は鍛太夫新左衛門で非常な傑作だつた。鍛太夫もこんな端場を語ると如何にも昔の太夫らしい味があつていゝ、特に腰元が甘い。禪正も結構であつた。新左衛門の糸も義太



夫節、三絃の最後の立端場弾きの特長を心行くばかりに發揮する點、實に水際だつて居る。土佐太夫、文樂を去つて鍛太夫の端場は其の帶屋に於ける六角堂が最終かと思つたのに、今日の廊下を聞いた事を喜ぶ。

古靱太夫の長局は始めて聞いたが、尾上が一人舞臺になつてからの後段になつて、品物は小さくても紋下らしい藝質を發露する。特に此度の様な聲に難のない時に此の感が深い。津太夫の沼津は衰への少しも無いのが昔ながらに嬉しい。此の度は平作が玉次郎でなく門造だが、結構だつた。

次の大江山の辰橋は觀覽税。

松竹大好物の攝州合邦ヶ辻下の巻は、前半が相生太夫、道八、後半が織太夫、團六の日だつた。道八の絃は新左衛門と反對に、間を要する時代物を弾いてる時最も特色が出る。先日妹背山の判事の出の様な場合が其れである。先日東京で、清水町と松葉屋以上の妹背山を聞いたが、道八のは亦其れ以上である。

相生太夫も進境が見へて嬉しい。

先日私は某氏から意外なニュースを聞いた。新織太夫は玉手御前は最後まで俊徳丸を戀して居る。即ち邪戀を精算して死ぬとの新解釋だとの事である。

私は全く啞然とした。暗然とした。其れならば古靱帥の身邊は益々寂しい。

團平の合邦の猛練習に卒倒した三代目大隅太夫は迷府で此

れを聞いたら再び卒倒するだらう。皮肉にも其の織太夫が合邦の後半を語るのである。私は電報用紙をふところにして息を詰め堅唾を呑んで玉手に聴き入つた。天、幸にも有望の新人を捨て給はず、無事に語り終つた。私の眼の中には光るものが有つた。私は、つばめ太夫を熱愛する田中煙亭翁に「ツバメ、シス」と電報を打たずに済んだのである。織太夫よ、東京市外、世田ヶ谷に田中煙亭ある事を忘れ給ふな。

團六には、三代目清六の「玉手は氣丈の身がまへ」以下段切れまでのレコードを聴く事をお勧めする。人形は合邦に限り小兵吉の合邦に榮三の玉手御前、或は玉次郎の合邦に、小兵吉の玉手御前で見たい希望を私は常に持つて居る。

#### 第四回 七月十一日見物

昨年九段目抜き忠臣蔵を出して東京の素義連中からうんとお小言を食べた爲か、此の度は一、二、五と七を半分抜いて九段目、打入りと通して出した。

お客様の御注意は何でも承ります、などと表面甘い事は云ふものゝ、素人の云ふ事などは馬耳東風で、頑固、自尊の興業師の此の度の狂言の建て方は素直過ぎて笑止の感が深い。が何にしても結構な事である。

三段目では門造の師直は昨年榮三より敵役に使ふのを一興とする。紋十郎の判官は師直の悪口の間真妙に平服して居るのはおかし、一考を要する。

義太夫の方で演る「御酒参つた」の前に演る笑を、歌舞伎では言葉の後で演る。此れは先人研究家が誰も書いて居ないと思ふから特に附記して置く。菊五郎だと怒氣をおしかくして、ふるへながらの笑が殺氣立つて見物に通つて美事である。

裏門は榮三の勘平、文五郎のお軽、共に哀艶切實な人形美を見せる。此度の文五郎ではお軽とお政が代表的な結構さである。あの段切れの人形獨特の足拍子も、二人の中一人缺けても、梅幸に死なれた羽左衛門、菊次郎に死なれた菊五郎になるのかと思ふと、亦しても、文樂の愛好者は別れに行つてやつて望しい様な氣がする。

四段目では最負の大隅、亦してもエラーの様な氣がする、「もの也」など甘くない。

此の場の人形は面白くない、玉藏の石堂など立役らしくない感がある。

小兵吉の郷右衛門は忠臣藏人形中の傑作で、此人が不遇の内に造詣の深さを見せる役として感服するが、花献上の座る位置の九太夫の下手、郷右衛門の上手はおかしいと思ふ。「後に續いて斧九太夫」の文章は出て来る説明の文章で、座席の説明では無いと思ふが如何。

唯、人形の力彌は由良之助の小刀を持ちそへたり、段切れに顔世の手を引いたり色々の仕事を演る、使ふ榮三郎亦眞妙に使つて居る。霞ヶ關の段は觀覽税である。時間節約の爲なら食つてしまふに限る。我等は何時も此處の太夫に氣の毒で

たまらない。

榮三も老齡である。あのくだらない引込みは休ませておきたく思ふ。

六段目身賣りの段。

誰のを聴いても勘平が来てから少しもシンミリしない。婆の「指切れ髪切れ」のホロリとする言葉も甘く語つたのを聞かない。

古靱太夫の六段目。三宅周太郎氏は、古靱太夫の四段目は買つてるが六段目は買つて居ない。が私は古靱の六ツ目は四ツ目と共に非常な傑作だと前から思つて居る。

忠臣藏が出ると何處をあてがはれても得をするのが古靱太夫で、土住太夫と津太夫は何處をあてがはれても得色が出ない様な氣が、私は昔からして居る、(但し土佐のお軽は結構)今度の六ツ目などは非常に結構だと思ふ。

おかやの「あんまりあきれて」や「殺された事じやまで」勘平の「はつとばかりに」や「熱湯の汗を流し」郷右衛門の「情けなきは」と「理を責むれば」此の六箇所が此の度の小新演出と云ひ得ると思ふ。

七段目は大省略で語る太夫に氣の毒なので評なし。

人形も由良助はいゝ所を省略されてしまつて氣の毒である。平右衛門は九太夫を差し上げた人形獨特の大時代な見得が面白いが、赤い裏地の見えるのは目ざわりで困る。其れと玉幸の平右衛門は義太夫の文句より仕草が早過る様に思ふ。

八段目は義太夫道行中の王座を占めるもの一つ、何としても此の太棹節の合奏を聞く事は愉快至極である。

此處で私は一説がある。新左衛門のやうな文樂中最もいゝ音色だが一寸少音である人を連れ弾のタテに使ふ事は、聴く方の側から見ると不經濟の様な気がしないでもない。

然しこれは若手のお稽古臺としてと云ふ建前からならば其れは亦別問題である。

津太夫の九段目。

此の人の九段目を其の沼津の如く、最も津太夫の長所の出る語り物と云ふならば、一寸私は反対である。私ども素人でも其の至難中の至難とする前半の約束、後半の語り場、其の口傳は色々に聞かされて居る。然し、二代、三代の越路、大隅さへ聞かぬものが、其の能書だけならべても仕方がない。

大正十二年秋、越路急休による初役以來、最も多く此れを上演して居る樽下の、此の度の東京に於ける一生一代を聞くべく私は日參した。特に其の千秋樂は、初日に大出來の理由で知遇に報ゆる爲か近江清華氏を招待したさうである。私は此れを藝界の一佳話として讀者に紹介したい。

藝人は己れの藝を知る人の爲に總てを捧げて歎しい。津太夫の今日ある誠に此の善き藝術感に因をなして爲であらふ御座なりばかり云つて、祝儀ばかりあてにする藝人の末路程不便なものはない。

此の度は本藏はもう玉次郎には使へないと見へる、寂しい

事である。

九段目の段切れは歌舞伎がめちやくに冒瀆して居る爲か人形淨瑠璃の其れは美しい。文五郎の戸無瀬が本藏の落入り姿を消す事も私は老齡故に深く其れを責めない。

然しこれは七十一歳の高齡で常に暮ごと出す張りに大役を持つて居る爲にである。

決して偉い人形使ひは其の特權が有ると云ふ爲では斷じてない。

文樂座附の老人連よ。身體を大切に來年も、一人も缺けず上京する様に、私は心に祈つて一人寂しく八王子行の終電車に乗つた。

今にも降り出しそうな、星一つ見えない空合だつた。

## 暑中御見舞

東京市京橋區木挽町五丁目一番地十三號

辨松本店 玉井仙太郎

松 樂

ラヂオ 浄曲漫評 金五七

文樂紋下

〔六月一日〕

假名手本忠臣蔵

山科の段

竹本津太夫

絃 鶴澤綱造

津太夫の九段目である。これは、記憶の好い我等はよく覚えてゐる。昨年文樂一座が東上した時、最終興行に、忠臣蔵を出し、これが都合で七段目の茶屋場までを演じ、山科を出さなかつた爲めに、東都浄曲愛好家、津太夫ファンの人々は忠臣蔵を出して九段目を聴かさないのは法にあらず、怪しからんと、騒ぎ出した事があった。その時に津太夫は、ある最負筋に對して陣謝し、實は『本』まで用意して來たのだが、會社の都合でやれなくなつた、來年は必らず御希望に副ひま

せう、といふ一つ話が殘されたほど、當今、浄曲界に於て、九段目を語る太夫は、我が津太夫師にト、メを刺してゐるのである。――後に判つたが、その約に違はず

七月東上の文樂では、津太夫の山科が出たのであつた――さて、ラヂオでは？時間制限の關係から、奥の本藏の出より段切りまでを語られた。『笠脱ぎ捨てしづ〜と……』あゝ我が津太夫！『案に違はず拙者が首、掣引出に欲しいとな、ム、ハ、ハ、』の笑ひの大きさ、腹の強さよ。力彌の槍に肌骨を突かれてからの、例の悲痛な物語、主人の鬱憤……以下、確かに堪へる。彼の時平の七笑ひ、加藤の毒酒の大笑ひと共に所謂三笑ひと稱される難物も、何の苦もなく、充分に津太夫ファンの溜飲を下げさせた。絃の綱造師、例によつて弾きまくり、達者な撥

音に、太夫とは別々のあたり構はぬ……イヤそれで好いでもあらうが、翻つておもふ、大體に於て津太夫師もやゝ行留りか、ともすれば詞尻りが下つて、ハツとおもはせる個所が無いでも無かつた事を附加へて置かう。

前因會長

〔六月七日〕

鎌倉三代記

三浦別れの段

竹本津賀太夫

絃 鶴澤紋左衛門

第二放送の演藝時間は、主として國民精神的の教化に資する材料を撰ぶといふ建前である。さればこそ物語、講談、浪曲、琵琶等々々、何れも艶つばいものその影をひそめ、所謂修養、美談を聚められ、中には變哲も無いものまで聴かされる御時世。その見地から――といふと少し堅過ぎるが、この三代記はどうあらうが、時姫を主とした前半、親に背いて焦がるゝ殿御、果ては父時政を討つて見せうなど、随分以てヒド過ぎる品物ではな

いだらうか、その實は、戰國のならひとあつて、シカモ佐々木は眞田、三浦は重成の變名であるといふ、戰術機略縱横と申せば、やゝ緩和される次第であるが、などゝ我等一應野暮を申しておいて、全くの處、久し振りの津賀さん、頗る期待してスキツツを入れたのであつた。『されば風雅の歌人は……』から三浦の出、持つて生れた艶は、引退後の今日、なほ少しも衰へず、『ヤア三浦様かと駈寄つて、抱起さんも大男』など水の滴れるやう。

『ム、思ひも寄らぬ時姫どの』の三浦の詞、思ひものもは不要である。大した事ではないが、是非津賀さんあたりの大家は本文通りに願ひたい。全體、斯うした誤りは津賀さんには多いやうにおもはれてならない。『お寝顔なりと』や『靜に〜』や『百筋千筋』など結構な出來、續いて『どうやらつんと』の例の時姫の口説きは無論、『ゆききつ、もどりつ』も大によく『みじかよ』でチョンは、時間一杯ながら誠に惜しい位であつた。紋左衛門氏の絃は、可もなく不可もなし、と片つける

べきものであつた。言ひ忘れたが、『此城一重破らるゝなら』までの、病母の切言は殊に力がはいつて、満點ものであつた。三浦の木村重成で想ひ出したが、金王丸は、往年態々拜聴に出かけた津賀さん自身身の節付と承はる、重成血判取といふものがあるが、これなどは、所謂第二放送用として、至極なものであらうとおもふことを附言しておく。

#### 文樂頭目

〔六月九日〕

#### 蘆屋道滿大内鑑 〓 狐別れの段 〓

豊竹古靱太夫  
絃 鶴澤清 六

我等の古靱、元氣の恢復が見えるのは先以て喜ばしい。放送は、昨年忠六の變つた勘平腹切りを聴かせたそれ以來である。今夜は又、師の十八番といつても可い葛の葉の狐別れであつて、ザラには聴かれぬ語り物の、時間も恰度四十五分といふ頃合である。所謂世話時代だから、狐別れは嚴として四段目であつて、師の

莊重なる音上の語り出し既に頗る我が意を得、庄司の不審に、ムキになつて言譯する保名の眞顔も眼に見えるやう。『あそこにも葛の葉、こゝにも葛の葉』のあたり『童子が母はおはさぬか、今歸りしと呼はれば』なども平凡にして平凡ならず葛の葉の『恥かしや淺間しや』から、童子を抱いての身の上述べ、例の尻上りの狐言葉も、大業ならずしてそれになり、それと判つて駈出た保名『たとへ野干の身なりとも物のあはれを知ればとて』以下の疊み込む悲痛の一節、地舎としての受け場の少ないを、ジツと締めて充分に段切りまで息をもつがせず、正に結構な上りであつた。唯だ、絃の清六氏、やゝもすれば弾きはヤツて、今一つ語らるべきを、せき立てるやうの個所があつたは、あながち時間の爲めとばかりではあるまい、と惜しまるゝ事であつた。

#### 大阪女義

〔六月十五日〕

#### 白石 嘯

揚屋の段 〓

彈語り 竹本小仙

白石の揚屋は、勿論女義には恰好の語り物であり、又た、女會我仇討物語りとしても、所謂國策の線にも副へる放送的淨曲である。語り手は、嘗ても大阪放送局の國寶と言はれた小仙さん、近頃家庭的に恵まれず、聞くが如くんば、第二の夫君と破鏡の嘆に陥り、これからは、愈上藝道一本槍で進みますと語つたとやら健氣にも悲痛な心構へによつて、語り出された宮城野信夫、心から謹聴致した次第である。歎きの中にも姉はなほ、妹が背を撫でおろし」以下のキキドコロも、今全盛を唄はれる花魁の一種の品位、田舎者とはいへ、純真無垢の信夫の可憐さ、さては、ドツシリと、會我物語の教訓も、情けの籠る惣六の重み、始んど間然する處なく「便りのないを杖柱、首尾よう年を勤めたら……」など、近頃結構な出来であつた。彈語りは、我等氣に入らぬ事なれど、この位のものなれば、それも達者な撥捌きで先づは堪能されられた。

### 文樂若手

〔六月十七日〕

#### 菅原傳授手習鑑

車場の段

時平公 竹本長尾太夫  
 松王丸 豊竹富太夫  
 梅王丸 竹本播路太夫  
 櫻丸 豊竹辰太夫  
 杉王丸 竹本さの太夫  
 絃 豊澤廣助  
 お囃子 望月大明藏社中

この菅原車場の段は、新聞の紹介によると、大正十五年四月に、相生太夫タテで出た以來、二度目といふ事であるが、東京では、玄人太夫連のカケ合で、其後一度出たやうに記憶する。今夜は第二放送の演藝に、之れを演出され、今の文樂若手連の競演である。絃を承はつた松葉屋の師匠が指導か演出か、とにかくおはやしを入れての賑やかさ。役々、人に嵌つて別段に甲乙もなく、又た彼是批評を加へるものでも無からう。我々は歌舞伎の舞臺でお馴染の曲であるから、お囃子

の上方式のが、聊か珍らしいとおもつて聞いたものである。

#### 元文樂庵

〔七月二日〕

#### 菅原傳授手習鑑

櫻丸切腹の段

竹本 土佐太夫  
 絃 野澤吉兵衛

後進に途を拓く、といふ譯で、昨年文樂庵看板を一擲して、花々しく引退の披露をした我れ等の土佐はん、名コンビ吉兵衛はんと共に、役柄打つてつけの「賀の祝」櫻丸切腹の段をマイクを通して、或はいつか東上の機會でも無くば、當分の枯れ切つた獨特の妙技に接し得ぬだらう、と思つてゐた我等を堪能させて呉れたのであつた。後半、櫻丸のくだりは、ともすれば、悪く陰氣になり勝ちな上りであるが、土佐はんは、所謂東風といふか派手に派手にと、しかも曲の悲痛さは勿論失はれず、就中、白太夫が傑作であつた。八重との間の情合もよく現はれる梅王——といひかけて、松王への氣の持

ち方も充分、一種氣味合の白太夫の笑ひも上乘、櫻丸と八重との情合も結構なり「無理な事いふ手間で一緒に死ぬとコレ申し……云々」の八重のクドキも、可憐の中に何とも云へぬ艶があり、土佐未だ老いずの感を抱かせる。二度目の出の梅王も可し、唯だ例の半音になると時折外れるのは致方なしとや言はん。我等は、その半ばに至らぬ中、さすがに土佐だ、如何にも文樂といふ氣分になる、と敬服したものである。吉兵衛はんの絃、よく太夫を助ける立派な女房役たる事いつもの如しであつた。イヤ此の處、ラヂオ淨曲の豪華な事よ。

東京新人

〔七月三日〕

### 八陣守護城

|| 政清本城の段 ||

竹本 越喜太夫

絃 鶴 澤 新 造

新人とは申しながら、嘗ては文樂にも居たとか聞く。今は東京で素義の御連中のお守りを仕て、愛宕山で試験をパスし、

所謂新人として三回の放送、爾來本職と認められての時折はマイクに向ふ。けふ日曜の晝間演藝に、清元や新内、漫談などと共に、短時間の御機嫌を伺ふ次第、ゆく先は二重に建てし思惟の間」の主計之助の出からだから、雉衣の「都でお別れ申してより」の艶も聴かせる、奥の間、加藤のイバリ、鼠の荒事まで、氣をよくして語られる。成績は先づ中の上か、前夜土佐はんのアトだけに、ラヂオだけのお客様にはチト損の卦。!!?

大阪女義

〔七月十四日〕

### 花上野譽の石碑

|| 志渡寺の段 ||

竹本 久 國

絃 豊 澤 蔦 之 助

大阪女子因會の幹部どこ、お二人とも勝鳳老師のお弟子との事、さすれば、御兩人とも相當のお歳とおもへ、又た早くから斯道に勉強のほど察せられる。第二放送のだし物としても、又た語り榮えのする藝題とも申さるべく、志渡寺は

可い。我等一二回しか伺つた事はないが、どうして、中々の上出来にて、殊に源太左衛門の堂々たる、アノ大笑ひの格に嵌つて大きい事、東京にこれだけの男太夫があるかツてんだ、又た全體に於て少しのたるみもなく、今人氣のある團司などより確かに買へる品物だ、と、我等同席の一傍聴者はほざいてゐた、事ほど左様に、引つけられた。乳母のお辻が少し老け過ぎはせぬかといふ評もあるが、人形でも、襷し形ではあり、菅の谷とのつり合ひもあり、アレでも可いか、とにかく、まだ、義太夫は、大阪である。

東京故老

〔七月十九日〕

### 日吉丸稚櫻

|| 駒木山城中の段 ||

竹本 都 太 夫

絃 鶴 澤 龜 造

故人朝太夫の三枚目として、朝さんの艶を承けついで、美くしい咽を發揮してゐた都太夫さんは、眞とに以て古い存在である。東京の玄人連が、不振甚だし

く、或は影を没し、或は劇場の床にかくれるが中に、公演に、稽古に、近時更らに牙え返つた趣きのある我が都太夫氏のラヂオ進出は、聴き洩らされぬものであつた。教化主義による第二放送の演藝に、日吉丸の輿を出した語り物も、當を得てゐた。よし、師の特意の艶物は、むしろその前半であるとはいへ『せめて別れににし〜と顔見て死にたい我が夫と』や『髪結びやうかざりまで、幾千代祝ふ丈長も』など、いつもながら、若々しい美音心ゆくばかりのものがあつた。殊に『母も思ひに正體なく』の一句の如き、ちよつと眞似手もない妙技であつた。更らに師の牙え返つた努力は、五郎助の言葉の『ホ、オ、推量の如く』から堂々としてシカモ蔭腹の五音の調子まで、どうやら都太夫氏とは思へぬまでのイキで、故人小イ高の舞臺を想はせた。唯だ『半座をわけて相待つべし、ア、忝い、アレ聞いたか娘……ではないコリヤ……』を、娘で切つて、更らに『娘ではない』と重ねたのは、やはり最初だけで、冠せるやう

に……ではないコリヤ——とゆく方がよくは無からうか。限切のノリ地は、今一ト息派手に活氣をつけられたかつたが、近年メキ〜と腕を上げて來た文之助改め龜造氏の絃と相俟つて、おもしろい事であつた。最後に『照らすは月の熊本に清正宮(ぐう)と』が、ともすれば女義などの、清正公(こう)と聞えるのをはつきり宮と本文通りだつたのも、些事ながら、嬉しい事の一つであつた。

### 暑中御見舞

## 歸山歸世花

### 暑中御見舞

東京の海濱

別天地

利 鶴

森ヶ崎海濱  
電話大森八一八二番

修善寺温泉

茶代拜辭

のたや旅館

電話二二八番

大小宴會席・大小浴室  
離れ小座敷多數あり

御同伴に御静遊に  
閑靜な離れ(次の間附)

松葉温泉

ん 平

大宮氷川公園  
電話七一九番

各室御風呂附  
外線電話の設備あり



# 近事雜感

鴨 我 兒

身體をキチンと座つて久瀧の挨拶。流石に奥床しいことではある。

★演舞場での文樂で、東京の某人形遣ひが、大きな欠伸をしたり、前の人の椅子に頭をうつぶしたりしてゐたのは見慣い事であつた。

★演舞場で、竹本津太夫師の樂屋を訪れると、殿母太夫師が數個の煙草入を列べてゐる處だ、手に取つては見ないが、金具と云へ指と云へ、いづれも古物で珍らしさうなもの。津太夫、殿母太夫、煙草入、此の對照が何んとも言へぬ古風で面白く思つた。その時、裸の津太夫師は、立て浴衣に細帯をキチンと締めて、それから挨拶をされた。

古靱太夫師は、例の通り扇子を前に置いての謹嚴な挨拶振り。呂太夫師の樂屋を覗くと、師は今しも高座から下りて部屋へ戻つた處、先づ肩衣を取り捨て、汗を拭きたいところだが、肩衣もそのまゝあの大きな

★居留守を使ふやうな下等の紳士は義太夫界には無いが、居留守程厭なものはない。一層のこと『今は忙しいから』と斷られる方が、どんなに氣持がよいか知れぬ。

★顔があつて、こちらから挨拶をしようとする、先方でヒヨイと顔をそらして見ぬ振りをする人がある。みんな承知をしてをうて白らツぱくれる人の心理が、判斷に苦しむ。

★若い人が義太夫の評を書くとき『生意氣な何がわかるものか』と来る、老人だと『年寄の癖に』といふわけになる。何しろ『あなたの今度の何々は……云々』と言つたといふので、電車から御自分の奥さんを引き

づり下ろしたといふ話のある世の中。

★引退なり、襲名なり、その披露の記事や寫眞を掲載して貰ひたい爲めに、新聞又は雜誌社へ、番組だけを郵便でボンと放り込んでそれでいゝものと心得、後で記事の書き方が少ないとか、寫眞も載せないとかいふ藝人が多い中に、觀西翁師は道をふんだ鄭重な挨拶、藝界は斯うあるべきこと。

★『太棹』は温厚過ぎる、もう少しピリピリとやるがよいと御鞭下さるので、少しばかり温厚を破ると、人の書いたものでも恨みをうける、不思議に堪えない。

★何んにも關係のない輩が、自分の事のやうに方々で怒つてゐるといふ話を聞いて『江戸の仇を長崎で討つ』といふ諺を思ひ出した。

★某師と某紙との間に問題が起つた時、みんなカン／＼に怒つて、某紙の購讀を拒絕するとまで騒いで、其後一人も斷つた者がない。『太棹』はおとなしいから何んにも言へぬと思つて、購讀を拒絕するなんていふのは『弱い者いぢめ』といふもの、それはよくない事だ、と某老師の談。

吉野菊次郎原作・竹本叶太夫補作並作曲

# 乃木將軍美談錄

## 讚岐國 金倉寺 妻返し松之段

### 近江清華氏談

乃木將軍美談錄『讚岐國金倉寺妻返し松の段』は、當時陸軍中將であつた將軍が、明治卅一年十月三日丸龜十一師團の團長として赴任された時の出来事として、吉野菊次郎氏の原作を、竹本叶太夫師が補筆並に作曲されたものである。

義太夫の三味線は道行や景事物を始め、一段のうちに弾き所がいくらもあるから、其他の箇所は太夫を補佐して出なければならぬ。一體義太夫の衰微は、三味線を聞かさうとする傾きがあるので、無闇に弾きまはす爲めに、大切な義太夫の文句が消えてしまふことが一つの由因をなしてゐる。

三味線を聞くならば、長唄も清元もあつてそれで足りる。義太夫は斷然威彩を放つて、人情の美を語るのので、從來の演題は云ふまでもないが、この『妻返し松』は、三十分で凡てが明瞭と分かる、その點に於ては、浪花節の如きを凌駕して頗る大衆向きで、近來の傑作であると思ふ。

既に治る時津風、八州の浦の朝霞、いでその頃は、御稜威輝く、明治天皇の御代

暑 中 御 見 舞

竹本津太夫

豊竹古鞆太夫

日清の役に偉勳を樹てし、陸軍中將乃木希典閣下は、香川縣普通寺に戦後増設の、新第十一師團長として、三十一年十月三日、命を拜して程近き、四國七十六番の靈場、金倉寺に間借して早一年セ、従卒小笠原、馬丁鎌次郎の男世帯、質素の程ぞ賢けれ、秣を肩に百姓權作、畑ヶ調子の聲高に、鎌さんく、と馬丁を呼べど答へもなし、聲聞き付て、どなたですか、と座敷障子引明けて、木綿羽織の紋付に、小倉袴の乃木將軍、馬丁も従卒も今留守だが、ヤコレは將軍様でござエやすか、わしめは權作でござへやす、いつもの秣を持って参りましたが、直々お目にかゝりましては恐れ入ます、イヤく、軍服で職に就けば師團長だが、此なりでは個人の乃木だ、君と何等の變りはない、マア椽に腰をおろしなさい、アよい秋日和で結構ぢやのふさて改めて御禮をいふ、毎日秣を澤山頂戴して誠に有難う、イヤく勿體ない、罰が當りやす、世間には日清戦争で、大儲けをした人達が、別莊を建たり、着るに、喰ふに、贅澤の限りを盡しておりやすが、夫れに引かへ將軍様は、此お寺を假住居、木綿衣類で勿體ない事だと、村中でお噂を申てをりやす、アイヤく、夫れは人々の氣質によるものだ、私は軍人だ、軍人は質素を旨とせよと、お上の仰だ、知足以自誠、とアレアノ額に書てある通りだ、私は是で満足なのである、ヤコレハ又何と申しやして宜敷いか、誠にハ一恐れ入りやす、時に旦那様、ツカン事をお聞き申やすが、軍人様は嘘をつかぬと申しやすが、本當で御座いやしよか、コレハとんだ質問ぢやのふ、軍人は元より、人は二枚舌を遣はぬがよろしい、シタが權作殿、何やら譯がありさうだな、構はずばお咄しなさい、聽かせて貰ひませう、デハお詞にあまへ、ぶしつけながら身の上咄しを、一寸御聞き下さいやせ、モわしは不仕合せで、子供二人を養して、女房に死別れやしてから、男の手一つで、兄と妹を育て上やしたが、兄の方は日清戦争に、名譽の戦死を致しやした、其後チ妹娘と二タ人で、貧しい中にも榮しう暮しておりやすが、今年の夏わしが、フト大病に罹り、

暑	中	御	見	舞
竹本鍛太夫				豊竹呂太夫

お醫者や藥の入費がかさみ、僅かな貯金も使ひ果し、身寄りの者連はなく、モウ絶對絶命、死ぬるのを待つ計りでありやしたが、娘が申やすには、自分の身を賣て、其お金で入院をして、本復して下はれと、留めても留らず、泣いて申やすので、不便ながら死ぬよりつらい思ひをして、終に丸龜で藝者に致しました、そのお庇げで私は全快を致しやしたが、貧乏の悲しさ、いまだ娘の身受けも出來ず、不甲斐なさを歎いておりやす、處に此間、娘が歸つて申やすには、とつ様喜んで下せい、妾の夫が極りやした、と申しやす、仔細を聞けば、結構過ぎた咄しで、其相手のお人は此善通寺の陸軍中尉様だとの事、ナニ馬鹿な、中尉様ともあらふお方が、お前の婿などになつて下さる筈がない、是はてつきり騙されてゐるのだ、と申してやりましたが、今のお詞によりますと、或は本當で御座るやしようかな、と無心に語る權作の、詞の節々胸に釘、打たるゝ思ひ將軍は、暫し詞もなかりしが、色目見せじと茶を呑み干し、ム、そして娘さんの名は、ハイ、きよ、藝名は清香と申しやす、其中尉の姓名は、ハイ中村直人とか申すお方、と聞て將軍屈托の、思案顔なる有様にハツと氣の付權作は、我に返りて、旦那様、とんだ長咄しを致しやして、御免下さりやせと、袂を肩に庇の方、いそゝとして立て行く、後に將軍不興顔、眉をひそめて獨り言、勝軍に慢心して、聞きしにまさる風紀の紊れ、現在部下の將校が、有まじき藝者遊び、情けなき墮落やと、深き思ひに沈みしが、有合ふ視引寄て、何やらさらゝ書く處へ、使用濟せて從卒が、只今歸りました、と手をつけば、ヲ、小笠原か、シテ鎌次郎は、ハイ、今一緒に歸りましたが、既へ參りました、左様か、歸る早々氣の毒だが、此手紙を、副官葦原中佐殿に届けてくれ、さうして中村中尉を同道して歸れ、ハイ、と手紙を受取て、師團へこそは急ぎ行く、折に鄙には見馴れざる、人品高き一人の婦人、東を立てはるゝと、汽車や汽船人力の、車の旅の疲れをば、ものともせず夫の安否、いかゞと案じ善通寺、師團で尋ね金倉寺、御

暑	中	御	見	舞
鶴澤道八				豊澤廣助

堂を拜しいそくと、裏玄關に訪れて、お頼み申ますと、といふ聲に、住持立出で、どなたでござる、御遠慮なうお這入下さい、と氣安ス立に言はるゝ儘、デハお許し下さりませ、と内へ這入て一禮し、始てお目にかゝります、妾は静と申まして乃木の妻でござります、此度は圖らず、主人が御世話になりました、有難う存じます、としとやかな挨拶に、和尚驚き頭を下げ、コレハ、奥様であられますか、愚僧は此寺を預かる、松田俊良と申す者でござります、そこは端近、先々是へと褥を直し、ようぞやお出なされました、御遠方の所、嘸お疲れでござりませう、すぐお取次を致しませう、としづゝ立てお次ぎなる、將軍の居間に打向ひ、閣下に申上ます、只今東京の御本邸から、奥様が御越しになりました、といふや否、不興の聲に嚴然と、御住持、それは何かのお間違ひかと存じます、家内には、勝典、保典兄弟の、子供の教育其上に、家事の締りを命じてあり、殊に我等軍人が任地に在るは、則ち戰場に在るも同然だと、常々申聞せてあります、其心がけを忘れて、私の許しも受けずに、わざと尋ね來るべき筈はない、是はきつと外の乃木で、人間違ひかと存じられます、ともかく、其女性には逢ふ必要がありませんから、追かへしていただきたい、と餘りの詞に住職が、驚きながら取成して、成程、承はれば御最も、去り乍ら、いかに行通便利の世の中とはいへ、假りそめにも、百七八十里の旅をかけ、かよはい御婦人の只一人、はるゝ見えられたるに詞もかけず、顔も見せず、直ちに追ひ返さるゝとは、奥様に對し、コリヤちとお同情がかけてゐるかと思ひながら存じられます、先づ御面會を、と襖に手をかけ引明んとすれば、内より兩手で固く押しとめ、御意見は忝く感謝致します、乃木も木石にあらず、しかし只今のお説は、常人の事柄で、軍人として、殊に師團長として、多くの部下を預かる身が、萬ケ一にも、世間に誤解をされては、軍シの指揮に寛みが生ず、然れば第一御上みに、國民に、申譯けがありません、平に其儘お返し下さい、と信念強き筋道

暑	中	御	見	舞
鶴澤清六				鶴澤寛治郎

に、道の和尚も繰り返す、詞もなく、靜子の方、取付く島もなかりけり、涙押へて手を遣へ、お住持様、皆私が心得違ひを致しました、主人の詞に無理は有ませぬいろ／＼と御心配をかけまして、誠にお恥かしい此次第、どふかお許し下さいませ有難う存じました、此上迎も主人の事を、宜敷う御願ひ致します、デハ御免下さいませ、と詞少く立上る、氣強き夫にさからはぬ、妻の誠に和尚はなみだ、見送られつゝ出る寺内、我を松にはあらねども、根本に暫し佇立て、名残を惜みとぼ／＼と道が女の後髪引る、思ひ取直し、多度津港の船宿へ、とつかは急ぎ西へ日も、傾きかくる、其折柄、副官の命令に何事ならんと中村中尉、使ひと共に急ぎ足、椽先に立どまり、ハイ、中尉中村直人であります、とおとなへば、將軍は障子を開き、小笠原は部屋へ行け、中尉お上りなさい、ハイ御免下さいませ、と禮を厚うして座に着けば、將軍は詞を正し、少しお尋ねする要件があるので來て貰ふた、扱早速だが此先の丸龜で藝者をしてゐる、清香といふ者を見知つてゐるか、と意外の尋ねに隠しもならず、ハイ、存じてをります、ム、君は帝國の軍人たる事を、心得てゐるだらふ、ハイ、心得ております、軍人として、風紀を紊す遊びをしてはいけないではないか、其上、彼と夫婦約束をしてゐるとの事だが、本當ならば、何か格別の理由があるだらふ、隠さずといひなさい、と思ひがけなき詰問に、中村は赤面し、暫し頭を下げ居たる、やゝあつて、顔を上げ、閣下のお許しも經ず、彼れと約束致しましたるは、誠に申譯もありませんが、是には段々深い事情が有ます、甚だ失敬で恐入ますが、一と通りお聞き下さりませ、日清戦役當時私は、少尉として出征致しましたが、カノ牙山の戦ひに、一小隊の兵を卒ゐて、彈丸雨霰と降りくる中を、進めや進めと指揮の中チ、一彈飛で私の、胸部にスハ貫通と見た瞬間、一等卒山本が面前に立ふさがり、ばつたりと倒れ伏し、見れば肩口より渾々と流るゝ血汐、山本、傷は浅いぞ、シツカリせよと勵ませば、少尉殿、モウ駄目で有ます、あなたに

暑 中 御 見 舞	
桐竹紋十郎	桐竹門造 乙女文樂

代つて戦死するのが名譽です、と苦痛を忘れて健氣な詞、よくよく見れば深手の有様、コレいひ残す事はないかと尋ねますと、年寄つた父と、十七になる妹がある、凱旋の曉には、此よしを傳へてくれと、舌もこはばる斷末魔、ヲ、山本、其事なら引受た、安心せよと耳元で叫びますと、通じたものか私の手を握り、ニツコリとして幽かながら、天皇陛下萬歳を唱へて、立派な最後を遂げました、其詞が耳に残つて、寢ても覺ても忘れられません、然るに先き達て同僚の、歓迎會に招かれ、其席上山本に瓜二つの女があり、若しやと思ひ問ひかけますと、不思議や圖らず、山本一等卒の妹清香、則ち清子で有ました、父が病氣の爲に此勤めと仔細を聞いては尙更に、命の恩人山本への義理と、其場で直ぐに決心して、夫婦の約束を致しましたしかし決してやましい事はありません、何とかして彼れの身の代を拵へ、自由な體ダにした上で、同僚に咄したいと、秘密にした計りに、閣下にまで御心配を相かけ何とも申譯が有ません、誠に恐入ますと、始終を語る中村中尉、眞實面テに現はれたり、流石剛毅の將軍も、情には脆く感極り、流るゝ涙を押拭ひ、ヲ、よく判つた夫れでこそ帝國の軍人だ、死に直面していつた事を固く守り、約を變ぜぬ其真心、大和民族の血はそこに、そこに流れてゐるのである、乃木も嬉しい、悦ばしいぞ、やがて月下の氷人となり、晴れて二夕人を結婚さそふと、聞いて夢かと中村中尉、天にも昇る喜びの、折しも襖引明て、立出る住持俊良、委細の御咄しは、愚僧の居間へ皆筒抜け、遣がは軍人様ぢやわい、ハ、ハ、ハ、幸ひく、エ、處で貰ひ合せた諸白に、前途を御祝し申上げん、イヤナニ、小笠原様ンも、鎌様ンも、お出なさいませと呼出し、サア乾盃を致しませう、目出度い、萬歳、萬々歳、皆喜びの顔の色、照る紅葉かや乃木の花、將軍美談の古跡の一トつ、人呼んで妻返し、松と名の付く金倉寺、大師の徳と諸ともに語り傳へて残しける。

暑	中	御	見	舞
<p>箱根強羅温泉</p> <p>茶代 癱止</p> <p><b>觀光旅館</b></p> <p>電話(一六〇番) 宮ノ下 三一一番</p>	<p>鶴巻温泉</p> <p>小田急鶴巻温泉下車</p> <p><b>光鶴園</b></p> <p>電話伊勢原一一番</p>	<p>宿泊料低廉</p>	<p>鹽原温泉</p> <p>省營バス終點・鹽原古町驛前</p> <p>茶代 癱止</p> <p><b>楓川樓ホテル</b></p> <p>電話鹽原六番</p>	<p>別館新築落成・舞臺付</p> <p>百五十疊大廣間</p>



# 音曲昔噺素養(三)

大阪 鐵 老 (寄)

今昔耳鳥齋主人の號は浪花音曲研究古  
考家として其名廣く、舊與銘人の事を辨  
へ、世上に融通せり。「文政の通人古太瓶  
藥居」親しく門に入て聞くに「昔噺の滋  
味理曉を、草紙の端に書きとゞめ、友樂  
初心者助けにも」と云々とあり、撰擇し  
て敢て一夕の笑樂の具に供し參らせん。

## 情ふかくと云事

高位高官、武家の御よそほひ、地下人、百  
姓、町人、その中にも、夫れ／＼の家業の風  
俗、人品上中下あり、學文したる人、文盲な  
る人、善人、悪人、といふも數限りはなし、  
其事其人となりを心得て、心得ちがひのなき  
様に語るべし。譬ば非人敵討の堤の段、春藤  
治郎右衛門兄弟はと語るに、武士と心得て語

れば、非人小屋に金襴を立ればならぬなり。  
實の非人にして語れば、治郎右衛門はなくな  
るなり。此段の語りには、只文句にて其へ通  
の譯を人に知らせる話し也。親の仇を討たう  
とおもう人の事をいふはなし。なれば深切に  
云ふて聞す心にて語るべし。是が情をふかく  
といふに似たものか、兎角筆にてつくし難し  
きてまた、御殿、館、屋鋪、藁葺、晝、夜、  
朝、晩、曉かた、深夜、人の應待、寛、急、  
喜、怒、哀、樂、氣色、或は詞になると、詞  
より他へうつるとの氣持肝要なり。

## 男女の區別並にコハリ のこと

男と女を、餘りわけて語ると、物眞似こわ  
いろに成る、音曲といふ事を忘るべからず。  
「コハリ」此ふしめつたむしやに物すぐく語る

暑 中 御 見 舞 申 上 候

淺 草 義 太 夫 音 女 會 一 同



事にもあらずと心得よ。

### 調子の事心得

淨瑠璃を語る座敷または場所の厚狭と、聴人の多きと少きとを考て、調子を取べし。聲があればとて、狭き所にて、戸障子をびりびりならしたとて、何の役にも立ぬ事なり。大きな聲じやと譽めらるゝばかりならば、相撲取の丸山を見て、大きな男じやとほめたも同然にて、聲の見せ物にて、音曲といふ事がなくなるべし。よくよく心得可被申候。

### 譽られ様の事

淨瑠璃を家業にする人は猶の事。所謂なぐさみに語る人にて、ひと節語るとも、笑はれぬように語るべし。譽られるやうに語らうとすれば、聲に慾がつきて、淨瑠璃の文句わからず、彼情をはすれ、ふし音位くだけで、本意を背くなり。何程けいこ上達して、扱々上手じや名人じやと譽そやそうとも、聽人を侮らず、音を定め情をふかく語れば、聽人感にたへ、たとへば小音悪聲の人と雖も聽人あゝおしい事じや、聲がやりたいといはざ、是も即ほめられたる詞なり。譽めると感ずるとの違あり。とくとおもひ比べて見るべし。

### 嗜の事

女中方に思はれようとおもひて語れば、淨瑠璃の實體かの情をふかくといふ事が、ぬける也。假言ば九仙山を語るに「のぼるひばりや歸る廬」といふ句、此文句のきれいやさしき詞を此節にて聲の良い人しなたるゝ聲をなやして、語つて見るべし。仙人もゴサンケイも姫君の道行のやうになるなり、とくと思案して見るべし。前號(十)とあるは(十一)の誤り。(終)

### 暑中御見舞

#### 貸並木俱樂部

浅草雷門  
電話浅二二三五番

義太夫席として皆様のお氣に召す俱樂部で御座います。

どちらからも最も便利で、落ついて聴くお方まできつと喜びます。乗物は電車・バス・地下鐵いづれも雷門下車、直ぐ近間でございます。

### 暑中御見舞

#### 革新睦會

浅草區象瀉町三五

飯塚領助

向島區吾嬬町西二ノ十一

中村榮一郎

深川區富岡町一ノ十一

伊藤徳次

下谷區入谷町二四一

木村延太郎

浅草區北三筋町四一

手塚隼久

日本橋區蠣殻町一ノ十一

田邊周作



▽本欄は通信又は番組御送付のもの、或は新生の會を報道するものであります。  
 ▽開催前月に詳細を報道したものは開催後の記事を略します。  
 ▽特種の催はしの外前置きを略します。

—記者—

## 綾秀會の静岡行

綾秀會有志は六月廿七日静岡に遠征、  
 銚後家庭慰安の義太夫會を同市稻荷町小林氏宅に催はし、翌廿八日は吉原にて大宮連と落合ひ、同町垣野邸に於て、三十秀、龍太郎  
 (廿八日) 日吉(綾路)新口(綾登) 忠六(佐七郎)十種香(三勝)寺子屋(壽瓢)毛谷村(龍司)酒屋(柳司)絃(綾路) (廿日) 日吉(綾路)沼津(供花)安達(綾登)忠六(佐七郎)十種香(三勝)野崎(壽瓢)合邦(龍司)絃(綾秀、龍太郎)宿屋(綾登)日吉(龍司)絃(綾秀)

## 滿鮮素義審査大會

七月十六、七の兩日午後一時より、竹本角太夫、麻生五福兩氏審査のもとに、

本三俱樂部に開催。

(初日) 日吉(錦聲、錦三)八陣(豊洲、梅若) 太十(柳清、錦三)杏掛(巴丈、竹子) 忠四(古雀、猿糸)陣屋(玉昇、未定) 儀作(松鳳、梅若) 新口(秀清、東廣) 太十(一鳳、梅若) 鯨屋(登雀、竹子) 酒屋(福若、梅彌) 中將姫(扇昇、東廣) 合邦(キング、梅若) 又助(美雀、猿糸) 長局(佳昇、てつ子) 忠四(登鶴、竹子) 中入(以下無審査) 赤垣(富士、梅若) 合邦(水音、猿糸) 鰻谷(圓八、梅若) 沼津(貴勢、錦三) 赤垣(望月、猿糸) 中將姫(楓江、猿糸) 橋本(吉彌、猿糸) 陣屋(清居、猿糸)

(二日目) 太十(墨水、錦三)野崎(あかつき、未定) 市若(春京、猿糸) 妙心寺(東、錦三) 辨慶(をすみ、錦三) 忠四(梅華、土佐菊) 妻八(榮司、猿糸) 合邦(吟醉、梅若) 寺子屋(美名登、梅若) 合邦(二引、竹子) 太十(吐月、梅若) 忠五(南北、猿糸) 忠四(紫扇、猿糸) 中入(以下無審査) 合邦(陸華、猿糸) 菅四(錦、未定) 合邦(吉野、未定)

湊町(佳美、猿糸) 鯨屋(華名目、東廣) 忠四(喜登、猿糸) 布四(露京、梅若)

### 第二回 清樂會

## 道之助連の吞龍行

先月十三日入谷俱樂部で初會を催はした清樂會は、第二回を七月廿九日夕より

小石川俱樂部で開催。

### 綾 秀 會

野澤道之助連は七月廿七日太田の吞龍へ詣で、同地見番樓上に於て義太夫會を催はし、翌廿八日は鮎漁で涼味を満喫、廿九日歸京した。語り物は左の通り。

七月廿三日西ヶ原俱樂部に開催。

辨慶(綾路) 鳴門(歌吉) 柳(綾登)

壺坂(喜聲) 帶屋(緋紗斗) 三代記(壽光) 野崎(壽瓢) 絃(綾秀、素女若、歌吉、綾路)

紙治(朝正) 宿屋(靜子) 新口(春子) 組打(幾子) 長局(智恵子) 湊町(清華) 絃(寛三郎)

忠四(筑波) 忠六(銀司) 先代(喜風) 宿屋(正風) 陣屋(玉寶) 逆櫓(旭) 順不同。

### 暑中御見舞

### 第六回 中老會

### 淨 無 名 會

### 三ツ木美登利

七月廿、廿一の兩日午後六時より交正俱樂部に開催、兩夜とも客席へ氷水を出して聴衆をもてなした。

七月廿八日丸の内電氣俱樂部に開催。

姫山姥(平茶、猿之助) 柳(美峰、猿藏) 吃又(和樂、猿之助、ツレ美之助)

鮫屋(國聲、猿三郎) 本下(巴、猿藏)

(初日) 組打(有明、新兆) 美濃屋(越巴、廣助) 八陣(可松、糸造) 腰越狀(茂里雄、清助) 新口(操、道之助)

## 滿鮮巡業の新義座

(二日目) 本下(有明、新兆) 鯨屋(奇聲、和歌吉) 酒屋(松玉、松四郎) 玉三(春和、糸造) 太十(紅司、勝風)

六月廿五、六日釜山の太平館を振出しに、滿鮮巡業の途に上ぼつた新義座は、

廿七日は大邸に開演、翌廿八日朝賑々しく京城に乗込んだが、嘗てつばめ太夫脱

退の際に義理上同座を引いて孤獨漂然京  
城に渡つた豊澤猿糸の出迎ひは、一別以  
來の涙ぐましき光景に、他の出迎ひの人  
々の目を濡らしめたといふ。

一行は挨拶まはり一日を費し、折し  
も廿九日より防空演習の爲め晝興行とし  
て、廿九、卅の兩日朝日座に於て華々し  
く開演した。何しろ、陣容一新改座後初  
めての入城とて、前にも増さる應援は白

### 暑中御見舞申上候

神樂坂へお越しの折は

富松葉

勝子

熱的同情化し、十餘年振りの陸路大夫を  
始め、同地竹本錦三師の弟叶美太夫への  
後援も盛んに、若手乙女文樂の人氣も又  
素晴らしく、幾組の總見に滿員の盛況を  
呈した。一行は安東縣、撫順、奉天と次  
々に巡業をして目出度歸阪、七月廿七日  
より京都の朝日會館に公演をした。

### 乙女文樂の東上

大阪文樂座桐竹門造師指導の乙女文樂  
は、去月新義座と共に滿鮮を巡業非常な  
好評を博したが、今秋は久々上京お目見  
得する由で、各方面から朝待されてゐる。

### 大東京嬉會の鍛練

國家の盛衰は國民の健康と否とに依る  
時變下銃後の國民精神に備へ、心身鍛練  
の爲め酷暑の候も厭はず、八月六日午後  
二時より淀橋區戸塚署前見田辯護士宅に  
於て盛夏義大夫大會を催す事に決定せ  
り。(森 三好)

當日の語物 壺坂(學士、花代) 安達  
三(快聲、三好) 揚屋(花代、單語) 八  
陣(喜三子、花代) 野崎村(文鏡、花代  
連喜三子) 三勝(喜三香、三好) 三十三  
間堂(三好彈語、尺八秋道) 沼津(美蝶、  
花代) 太十(學士、三好)

### 新築落成

高級  
アパート  
綠

莊

王子區岩淵町二ノ二五〇  
赤羽驛東口下車・郵便局裏

互調會  
女天會  
義太夫研聲會

其他各會も時折御開催になります  
が、その都度番組又は閉會後おハガ  
キにて御手数數乍らお語り物の御一報  
を願ひます。なほ樂屋話などの御通  
信も頂けますれば幸甚です。記事の  
輻輳せぬ限りは、成べく各席を巡つ  
て、讀者諸氏のお催ほしを公平に『各  
席當座帳より』として掲載するやう  
に致しますが、さもない場合は、本  
欄前書き通り掲載洩れになりますの  
で遺憾に存じます。

豊竹團蝶の行方（投書）

豊竹團蝶女は上京後兄の家に居たが、六年  
前から兄の家を出て處々を義太夫を語りま

つてゐるうち、十一年五月頃鈴ヶ森で稽古屋  
を開業したところ、駒登太夫の連中の某君が  
駒登太夫を後にして同女の元へ通ひ出して非  
常な力の入れ方、五十義會にも再三出て相當  
好評を受けてゐたが、最近行方不明となつた  
ので、連中は種々尋れたが依然不明、同女は  
頗るヒスで、連中の前でも某君に（中略）某  
君も連中も困つてゐたもので、某君が匙を投  
げた爲めからであらうといふ噂さ。（正會員富  
岡吉五郎）

記者より投書は都合で短縮も抹殺も致し  
ます。なほ住所氏名のなきものは没書にな  
る事を御承知願ひます。

暑中御見舞

久保田喜鶴

◆花輪◆花束◆花籠◆

暑中御見舞

御送迎・御佛事・御見  
舞は何卒弊店へ御用命  
願上候  
新花・廉價・迅速は弊店  
の特色

花

下谷稻荷町（青バス車庫前）

サカタ・フロリスト

電話（下谷）六一八一番

本誌後援名譽會員

(イロハ順)

(東京之部)  
 高島 一廣氏  
 廣瀬 いろは氏  
 岡崎 四六氏  
 吉川 浪補氏  
 平野 ろ昇氏  
 阿部 一氏  
 北島 北斗氏  
 中澤 巴氏  
 竹内 とる氏  
 安藤 どころ氏  
 吉田 登盛氏  
 小川 都山氏

安藤 都昇氏  
 保々 長平氏  
 栗原 千鶴氏  
 神馬 里芳氏  
 本木 大熊氏  
 鈴木 和樂氏  
 小林 和舟氏  
 本多 可笑氏  
 大和田 可笑氏  
 飛石 かなめ氏  
 加藤 兜氏  
 高橋 可遊氏  
 西田 可松氏

大用 大嘉津氏  
 田口 辰壽氏  
 疋田 大龍氏  
 井上 巽氏  
 小林 太二八氏  
 根本 團壽氏  
 野田 高尾氏  
 坂倉 素遊氏  
 浮谷 祖樂氏  
 小笠 長とる氏  
 宮本 武藏氏  
 萩原 うつぼ氏  
 乃村 乃菊氏  
 中野 吳羽氏  
 山下 彌生氏

國井 丸都氏  
 松林 福笑氏  
 鈴木 兒雀氏  
 水戸部 壽氏  
 原田 越巴氏  
 河野 國聲氏  
 松岡 語松氏  
 松田 光風氏  
 田中 湖月氏  
 寶藏寺 天昇氏  
 大築 葵氏  
 松本 朝章氏  
 及川 旭氏  
 柳 有明氏  
 寺岡 三幸氏

高瀬	岩田	吉良	岩木	猪谷	川奈部	歸山	淺田	錦	井田	金田	細川	平井	齋藤	木村
	末	蟻	義	銀	銀	歸世	奇	錦	菊	金	川	井	山	さ
操氏	成氏	若氏	雀氏	水氏	司氏	花氏	聲氏	松氏	泉氏	鳳氏	清氏	榮氏	生氏	かえ氏

武笠	濱口	田口	山田	平井	菊池	玉井	鈴木	吉田	池田	北村	岡田	野口	横井	吉田
	秋	司	壽	壽	秋	松	松	三	三	三		みな	三	美
宏亮氏	華氏	重氏	瓢氏	樂氏	月氏	樂氏	寶氏	芳氏	國氏	葵氏	源氏	と氏	由氏	地
														句氏

榊	同	同	同	同	同	米國	時田	沼井	湯原	近江	白井	松岡	桑原	高品
太	西	兼	杉	武	武	平野	田	井	原	江	井	岡	原	品
宮	本	廣	山	榮	一	野	靜	盛	清	清	清	茂	美	一
下	西	廣	陶	玉	昇	一	史	鶴	司	華	華	里	峰	重
杉	紫	玉	岳	氏	氏	氏	氏	氏	氏	氏	氏	雄	氏	氏
鳳	氏	氏	氏									氏		

横濱 田島 集樂氏  
大垣 吉岡 十八公氏





# 暑 中 御 見 舞

皆様の理想にピッタリとした特品

新考案

## レコード スタンド ケース

今までにない

素晴らしい

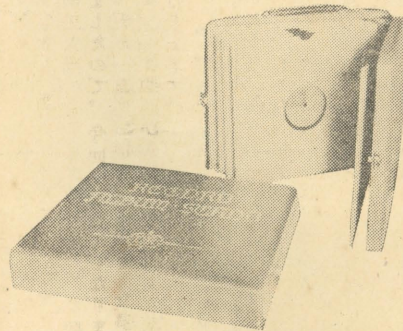
アルバムケース

です

レコード音楽

愛好家の皆様に

是非!!



特長

- 1 超モダーンの体裁
- 2 アルバム式(十二枚入)
- 3 携帯便利
- 4 堅牢至極
- 5 価格低廉

發賣以來非常な好評を戴いてをります。三越本店及一流樂器店にて販賣致して居ります。

美術ケース  
荷造箱  
蒲鉾板  
家具一式

東京市深川区清澄町二丁目十一

錦ケース製作所

考案者

錦學四郎

電話本所(73)二七六四番

宣傳中特價 ¥ 3.00 (十吋) ¥ 4.20 (十二吋)

暑 中 御 見 舞

名物 御守最中

うろこ餅

みのり

高級あられ五種の詰合  
御進物用……金壹圓より

煉羊羹

\*\*\* 趣味の名菓  
名なし草 \*\*\*

花の名にちなめる小形菓子  
三十餘種を取あはせたる純  
江戸趣味の御菓子  
御進物用かん入  
風流壺入  
はかり賣金八拾錢より

日 本 橋 水 天 宮 前

三 原 堂 本 店

電 話 茅 場 町 二 六 六 六 番

太 棹 社

富 取 芳 河 士  
同 三 久 子  
關 本 邦 治

栗 原 印 刷 所

牛 込 區 早 稻 田 町 五 八  
電 話 牛 込 一 四 五 一 番

昭和十三年八月十五日印刷  
昭和十三年八月十五日發行  
（每月一回廿五日發行）

太

棹

（第九拾八號）

定 價

金 參 拾 錢